Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ジェンダーから見る物語 : インドネシアのラーマーヤナにおける男性像と女性像 |
| Author(s) | 福岡, まどか |
| Citation | 大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2011, 37, p. 251-273 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/9258 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# ジェンダーから見る物語
## ―インドネシアのラーマーヤナにおける男性像と女性像―

福岡　まどか

目　次

１　はじめに
２　対象とする資料
　２－１　スナルディによる『ラマヤナ』
　２－２　コサシによる『ラマヤナ』
３　スナルディの『ラマヤナ』における男性像と女性像
　３－１　ラマの描写における男性像
　３－２　シンタの描写における女性像
　３－３　ラマ以外の登場人物に関する記述：武将としての男性像
　３－４　スナルディの『ラマヤナ』におけるジェンダーのステレオタイプ
４　R.A.コサシの『ラマヤナ』における男性像と女性像
　４－１　ラマの描写における男性像
　４－２　シンタの描写における女性像
　４－３　武将としての男性像に関する解釈
　４－４　ハヌマンとトリジャタの恋物語
　４－５　行動的な女性像の創出
５　まとめ

# ジェンダーから見る物語：<br>インドネシアのラーマーヤナにおける男性像と女性像

福岡　まどか

## 1　はじめに

この論考ではインドネシアのラーマーヤナを事例として、物語における男性像と女性像の描写について考察する。東南アジアには多くの物語が存在するが、古代インドの叙事詩ラーマーヤナは最も広く普及し、現在まで様々な上演芸術の題材として親しまれてきた。この物語は、8 世紀以降に東南アジアに伝わり、上演芸術をはじめ、書物、寺院や遺跡のレリーフ、映画、演劇、テレビドラマの題材、絵画・彫刻などの美術作品のモティーフを通して知られてきた。

物語の筋は、アヨーディアーの王子ラーマとランカー国の魔王ラーヴァナとの戦いを軸に展開する。アヨーディアーの第一王子ラーマは、マンティリ国で開催されたシーター姫の婿選び競技に勝利してシーター姫と結婚する(1)。結婚した二人はアヨーディアーに帰るが、継母であるカイケーイーの企みによって、異母弟ラクシュマナと共に森へ追放される。三人が森を放浪中、魔王ラーヴァナの妹がラーマとラクシュマナを誘惑しようとするが失敗する。魔王の妹はラーマの美しい妻を誘拐するよう兄をそそのかす。魔王は手下を金色の鹿に変身させ、シーターの気を引き、ラーマをおびき出す。弟のラクシュマナも鹿を追うラーマの後に続く。そのすきに魔王は老人に変身してシーターを誘拐する。助けを求めるシーターの声を聞きつけた怪鳥ジャタユが救出に向かうが、魔王にたおされる。ラーマは瀕死のジャタユからシーターが魔王に誘拐されたことを知らされる。悲嘆にくれるラーマは猿の王スグリーヴァと出会い、スグリーヴァの窮地を救う。そして武将ハヌマーン率いる猿の軍勢の助けを得て、ラーマは魔王の住むランカー国へ攻め入る。その途中で魔王の弟であるヴィビーシャナがラーマの軍勢に加勢する。ラーマ軍は、戦いの末ラーヴァナを倒す。シーターは自らの潔白を証明するため火の試練を受けた後、ラーマに迎えられる。

上記のような大筋は、善の側の主人公が最愛の妻を救出するために悪の側の魔王をたおす、という勧善懲悪のわかり易い筋立てである。この物語に登場する主人公のラーマ王子とその妃シーターはヒンドゥーの神話における理想的な男性像と女性像を体現する人物であり、理想の夫婦像ともされる。北インドの音楽文化に関する研究の中で、八木祐子はアヨーディアー付近の調査地で婚礼の際に歌われる歌にラーマとシーターに

関するものが多いことを指摘する(八木 1990: 176-200)。

主人公のラーマは、アヨーディアーのダシャラタ王と第一王妃スカサルヤーとの間に生まれた第一王子である。ヒンドゥーの三大神のひとりであるヴィシュヌ神の化身として位置づけられ、インドにおいてヴィシュヌ神を崇拝する人々にとっては信仰の対象である。戦いには常に勝利する強い勇者であり、容姿端麗の美しい武将でもある。高潔な志を持ち王としての資質を兼ね備えた人物とされる。

一方でシーターは、大地の女神の娘として位置づけられる。マンティリ国王女で絶世の美女であり、結婚後は夫に尽くす従順な妻である。また魔王の欲望に屈せずラーマの助けを待ち続け、夫のために貞節を守り続ける。

このように貴公子であり勇者であるラーマとその助けを待ち続ける美しいシーターとの対比は、コレット・ダウリングの指摘する「シンデレラ・コンプレックス」の概念とも共通点が見られる。ダウリングは、女性は他者に自らの人生をゆだねる傾向があり、自ら行動を起こすことを恐れる「成功不安」を抱きがちであることを指摘した(ダウリング 1984)。「女らしさ」という規定にひそむこうした特徴に関するダウリングの指摘は興味深いものである。牟田和恵はダウリングの「シンデレラ・コンプレックス」に関する考察を行い、ジェンダーの規範が我々の心の内面の奥深くにまで入り込んでいることを指摘する(牟田 1999: 134-136)。

ラーマーヤナにおけるシーターの行動規範は古代インドの叙事詩の中で規定されてきた女性の言動や行動様式をある程度まで引き継ぐものである。助けを待ち続けているのはたしかであるが、その一方でインドネシアのラーマーヤナにおけるシーターは、魔王に王としての非道を説き自分の貞操を疑うラーマに反論する女性であり、自らの思想を表明する女性という側面もある。しかし伝統的な物語世界におけるジェンダー規範を引き継いでいるため、魔王の宮殿から自分で逃げ出したり、貞操を疑うラーマに愛想を尽かす、というような現代社会の規範に見られるような自己決定や行動性の側面は描かれない。その意味で、ダウリングの指摘する「シンデレラ・コンプレックス」との共通点もあるだろう。

ダウリングは主として実際の日常生活におけるジェンダー規範に焦点を当てて考察を行ったため、シンデレラという物語の中の登場人物像の特徴について細かい検討は行っていない。一方でこの論考における私自身の関心は物語の中で描かれる男性像と女性像のあり方である。物語の世界におけるジェンダー規範は多くの場合ステレオタイプ化されたものであり、日常生活におけるジェンダー規範と必ずしも一致するとは言えない。しかしその物語を享受する人々にとって理想とされる規範の一つではあるだろう。前述のようにラーマーヤナはインドから伝わり、インドネシアで受容された物語であるため、インドにおける思想や価値観に加えてインドネシアにおける独自の変化や解釈が存在する。以下の記述においては、インドネシアのラーマーヤナにおける登場人物の言動や行動様式を検討することによって、物語の中で表現される男性像と女性像について考察する。

ラーマーヤナは東南アジアの各地で仮面劇、影絵、舞踊劇、歌謡などの上演芸術の題材として知られている(cf. 福岡 2009b, 2010)。この論考では、インドネシア・ジャワ島の影絵芝居のレパートリーに基づいて 1979 年に書かれたインドネシア語の書物(スナルディ Sunardi D. M. による『ラマヤナ Ramayana』)と、1975 年に創作されたコミックのラーマーヤナ(R. A. コサシ Kosasih による『ラマヤナ Ramayana』1975)を取り上げて、両者に描かれる男性像と女性像の特徴やその相違点について考察する。

なお以下の記述において、資料の内容に言及する場合には使用する資料に合わせて物語の題目名と登場人物名を表記する。具体的にはラーマーヤナはラマヤナに、ラーマはラマに、シーターはシンタに、ラーヴァナはラワナに、ラクシュマナはレスマナあるいはラクスマナに、ハヌマーンはアノマンあるいはハヌマンとなる[(2)]。

## 2　対象とする資料

### ２－１　スナルディによる『ラマヤナ』

第一の資料は、スナルディ Sunardi D.M. によって 1979 年に書かれた『ラマヤナ』*Ramayana* である。この書物はインドネシア語で書かれている。土台となったのは『スラット・パダランガン・リンギット・プルワ』*Serat Padhalangan Ringgit Purwa*(『ワヤン・プルワの上演の書』)という書物である(以下、『スラット・パダランガン』と表記する)[(3)]。これは、インドネシアのジャワ島における影絵芝居の物語の集大成である。ジャワ島中部スラカルタ宮廷の王マンクヌゴロ 7 世の命によって影絵芝居の演目を 37 巻にまとめたものである。

ジャワ島の影絵芝居の物語は、『スラット・カンダ』*Serat Kandhaning Ringgit Purwa* (「ワヤン・プルワの物語の書」)と言われる物語群の系統を引き継ぐ。『スラット・カンダ』は、16 世紀以降にジャワ島に伝播した物語群で，ジャワ島の北海岸地方にイスラームを基盤とする諸王国が成立した時期に作成された。したがってこの物語は主としてインドネシアのジャワ島に普及したヴァージョンである。440 詩篇からなる長大な韻文作品で，第 22 詩篇から第 80 詩篇にいたるラーマ物語を含め，当時流布した様々な物語が収められている(青山 1998: 148, 大野 1993: 42-46)。『スラット・カンダ』はインドでヴァールミーキによって書かれたとされるヴァージョンとは系統の異なる物語群であり、ジャワ島独自の物語群として位置づけられる[(4)]。『スラット・カンダ』に収められた物語の特徴は，魔王ラーヴァナの出生と悪行を語る部分が大きな割合を占めていることで，ラーマ登場以前にラーヴァナを制圧したアルジュナ・サスラバーフ王の活躍が多く描かれる。インドネシアのラーマ物語に関する研究を行った青山は、この系統の物語の特徴として(1)魔王ラーヴァナの系譜を物語の前半に取り込み詳細に語っている，(2)シーターをラーヴァナの娘あるいはラーマの妹として位置づけている，(3)猿族の系譜を詳述しており中でもハヌマーンをラーマの息子とする，などの諸点を挙げている[青山 1998: 142,148-150]。

この論考で考察するスナルディの『ラマヤナ』は、上記の『スラット・カンダ』との共通点が多い影絵芝居の物語を土台とする。ただしラーマ登場以前のエピソードではなく、物語の中核部分となるラーマ王子の冒険とラーヴァナとの戦いを描いており、『スラット・パダランガン』の第 36 巻と第 37 巻に相当する[(5)]。ここで見られるエピソードの多くは、ジャワ島の影絵芝居の主要なレパートリーとなっている。影絵芝居の上演は台本を使用するものではないため、書物と上演において物語の細部に至るすべてが一致するわけではないが、登場人物の特徴や筋立ての特徴などに関して多くの共通点が見られる。『スラット・パダランガン』の 36 巻と 37 巻に収められたエピソードは、以下のものがある。

36 巻：アヨディアの陥落 Jatuhnya Negri Ayodya ダサラタ王の結婚 Perkawinan Dsarata シンタとアノマンの誕生 Lahirnya Dewi Sinta dan Anoman ラマとシンタの結婚 Perkawinan Rama dan Sinta ラマ愁嘆す Rama Gandrung ラマ王 Prabu Rama マリアワン山 Pasanggrahan Maliawan アノマン使者に出る Anoman Duta ラマ大海を埋め立てる Rama Tambak 使者アンガダとブビス Anggada Duta dan Bukbis

37 巻：トリカヤの戦死 Trikaya Tewas トリシラの戦死 Trisirah Tewas クンバカルナの戦死 Kumbakarna Tewas マガナンダの戦死 Megananda Tewas ラワナの戦死 Rahwana Tewas 埋め立ての後退 Tambak Undur シンタの火の試練 Sinta Obong ラマ転生す Rama Nitik dan Rama Nitis

スナルディの『ラマヤナ』は、基本的には上記の 2 冊を土台とした翻案である[(6)]。始まりの部分の「シンタとアノマンの誕生」、最後の「ラマ転生」などが欠如しているが、大筋はほぼ上記の章立てと一致する。この資料を用いることによって、ジャワ島に流布していた影絵芝居の上演における物語の内容を知ることができる。

### ２－２　コサシによる『ラマヤナ』

一方、この論考で考察するもう一つの『ラマヤナ』は，1975 年(推定)にインドネシアの漫画家 R.A.コサシ(1919-)によって書かれたコミックである。コミックの冒頭と末尾に 1975 の記載があり, 1975 年までに描かれ 1975 年に出版されたものであると考えられる。コサシの『ラマヤナ』は 1960 年頃にすでに描かれており、この論考で考察する『ラマヤナ』はコサシが最初に描いたものではない(cf. Boneff 1998)。コサシのコミックは異なる二つの出版社から出ており、1975 年のヴァージョンは第二の出版社であるマラナタ社(現エルリナ)社から刊行されるにあたってコサシが新たに創り直したものである[(7)]。70 年代以降もコサシはマハーバーラタやラーマーヤナのコミックを出版社の意向に沿って何度かヴァージョンアップしたようだ。インドネシア人ジャーナリストであるクドリの記述によると，出版社のコスト削減のために原画の縮小印刷ができなくなり原寸大での執筆が必要となったためコサシはコミックを何度かヴァージョンアップしてきた(Chudoli 1991: 62-63)。同じく短編小説家、ジャーナリストであるアジダルマは、70 年代

の『ラマヤナ』は 60 年代のヴァージョンをトレースして描き直したものであり、画像の質が低下し登場人物の詳細な描写が見られなくなった、不必要な効果音や擬音語が挿入されたことによって作品の質が低下した、などの点を批判的に指摘する(Ajidarma 2000)(『コンパス紙』2000 年 11 月 5 日の記事)。これらのヴァージョンアップに伴って物語の内容も変化したかどうかという点は明らかではないが，いずれにしてもコミックの『ラマヤナ』にはいくつかのヴァージョンが存在すると考えられる。

バンドゥンのマラナタ社(現エルリナ社)によると，コサシのコミックの需要の最盛期は 1970 年代であった[(8)]。1960 年代に出版されたコミックを入手することができなかったため、この論考ではコサシのコミックの市場における需要の最盛期であった 1970 年代刊行のものを考察する。このコミックはA，B，Cの 3 巻からなり，全体は以下の 10 章に分かれている。

(1) マンティリ国の花を奪う Memperebutkan bunga Mantili
(2) ダンダカの森での災い Bencana dalam rimba Dandaka
(3) ハヌマン使者に発つ Hanuman duta
(4) ハヌマン，アルンカを焼く Hanuman membakar Alengka
(5) バンダラユの海峡を埋め立てる Menambak selat Bandalayu
(6) アルンカでの流血の戦い Banjir darah di Alengka
(7) サルパカナカとプラハスタの最期 Ajalnya Sarpakanaka dan Prahasta
(8) ハヌマンの息子トゥガンガ Tugangga Hanuman putra
(9) 残忍な報復 Pembalasan yang mengerikan
(10)粗暴なる王(の最期) Angkaramurka

このコミックの特徴は、コサシ自身による物語の改変と創作が多く見られる点である。私は、別稿でこの改変と創作の特徴について考察をおこなった(福岡 2009a)。この論考では、主として男性像と女性像の描写に限って考察を行ってみたい。

## 3　スナルディの『ラマヤナ』における男性像と女性像

### 3－1　ラマの描写における男性像

最初に、主人公ラマに関する描写について考えてみたい。第一の特徴は、ラマの王としての資質に関するもので、特にウィスヌ(ヴィシュヌ)神の転生として位置づけられる点である。ラマの誕生に関しては、輝きを放つ男児の赤ん坊が生まれたことから彼がヴィシュヌ神の真の転生であることは疑うべくもなかった、という記述が見られる(Sunardi 1979: 14)。

また物語の結末で、ラマがラワナを倒したところにも下のような記述が見られる。

> 天界の女神たちは芳香を放つ花々を振りまいた。彼女たちは、ウィスヌ神の真の転生であるラマに敬意を表した(Sunardi 1979: 318-319)。

このようにラマは、ウィスヌ神の転生として人間界の正義を守るために存在しているという点が物語の各所で示される。王が神の転生であるというとらえ方は王権に聖なるパワーを付与するという考え方である。この考え方は古代インドの叙事詩において、またヒンドゥー王朝の影響を受けるジャワの王権世界においても重要な要素であると考えられる。

この他にもラマの王としての資質や美徳に関する記述は多く見られる。第 2 王妃である継母の姦計によって森へ追放された際に、ラマは父王に破約の罪を犯させないよう自ら妻と弟を伴って城をあとにする。以下は後を追ってこようとする家臣たちに対するラマの台詞である。

> 「おまえたちは宮殿へ帰りなさい。私は王をとても愛している。王の命ずることのすべてを遂行するつもりだ。私が世の中を知り、進むべき方向を知ったのもすべて王のおかげだ。戻って父王に伝えるのだ、私が喜んで深い森の中へ入っていくと」(Sunardi 1979: 30)

この台詞は、年長者に対する恩義と忠誠を体現する。恩義と忠誠はジャワにおいて武将としてまた王として必要とされる重要な資質である。さらに以下の記述は、武将としての強さ、賢さ、高潔な精神のあり方に関する特徴に言及したものである。

> ダサラタ王の 4 人の息子たちの中で、王としての資質、武将としての技能、品格、精神力などの点で最も優れていたのがラマバドラ(ラマの意)であった。彼こそは、すべての学問と技能を身につけ精神の強さを得ている。彼は師匠を愛し尊敬しており、驕り高ぶることなき品格を備えた人物であった。(Sunardi 1979: 15)

ラマの強さや武力についての記述も多く見られる。シーターの婿選び競技に参加した際には、マンティリ国に伝わる弓を多くの武将たちが持ち上げられない中で、ラマは見事にその弓を引いてみせる(Sunardi 1979: 22)。

また武力は、自身の強さのみならず、秘匿の武器を有しているという点でも強調される。宿敵ラワナに相対する際にはラマは、グアウィジャヤと呼ばれる秘矢を用いて戦いに挑み、ラワナを倒す(Sunardi 1979: 317-319)。こうした聖なる武器を占有的に与えられているということも、強さの重要な要素である。

このように、聖なる力の源ともなり得る神の転生として生を受けていること、高潔な精神を備えていること、武力に長けており秘匿の武器を所有することなどがラマの特性として挙げられる。

### ３－２　シンタの描写における女性像

一方でシンタに関する描写はどうであろうか。際立っているのは、彼女の美貌についての記述である。以下の記述は、修験者ヨギスワラ(ヨーギシュヴァラ)がラマにマンティリ国での婿選び競技に参加するよう勧める部分で、シンタの美しさについて語った台詞である。

> しばしの沈黙の後ヨギスワラは言った。「息子よ(ラマの意)、ジャナカ王の娘シンタはこの世に並ぶもののない美しい姫である。天界のすべての女神たちでさえ彼女の美しさにはかなわず、その美貌は輝きを放っている。」 (Sunardi 1979: 21)

結婚式での新郎新婦の美しさに関しては、以下のような描写が見られる。

> 参列したすべての客は二人の新郎新婦の美貌に心を奪われた。二人が共に歩む姿はカマジャヤ神とカマラティ女神(ジャワ島における夫婦和合の神)のようであった。そして二人は王(ジャナカ王とダシャラタ王)に手を合わせた。参列した女神たちはシンタの美しさをいくら眺めても満足することがなかった。彼女達の誰もその美しさで並ぶものはいなかった。また新郎を見ている客たちはその美しさに見とれて、多くの女性客は飲食を忘れてしまうほどであった。(Sunardi 1979: 24)

戦いの終了後にシンタがラマに会う場面でも以下のような記述が見られる。

> デウィ・シンタはすぐに身を清めた。水浴をして、身体に香水をつけ、腰布を替えた。ほどけていた長い黒髪を髷に結い、たくさんの花々で飾った。驚嘆すべきことに、悲しみでやせ細ったシンタの身体は、火神ブラマの妻ララサティにもまさる美しい身体に変わったのである。天界の女神すべてに勝る美しさである。このマンティリ国王女こそは天界の女神の中の女王としてふさわしい(Sunardi 1979: 323-324)

このように、理想の女性像とされるシンタの特徴としては、美しさという要素が重要視されていることがわかる。また結婚式の場面に見られるように、美しさの描写はシンタのみならずラマについても見られ、理想の男性像にも美しさが必要であることが示される。通常、ジャワの伝統的な物語の中では外見の容姿の美しさは内面の高潔な魂や精神性を伴うという考え方が強い[(9)]。主人公の二人の登場人物の美しさは、その意味で国を率いる立場にある王とその妃の資質を示すものでもある。

一方で女性にとって重要な概念は貞操に関する概念である。魔王の宮殿で囚われの身となったシンタは懐剣を離さず自害の覚悟をした上で、魔王に誘拐という卑怯な手を使い、ラマに向き合う勇気を持たないことの非をなじる(Sunardi 1979: 130-133)。

またラマの軍勢が戦いに勝利した後、シンタは身を清めてラマの前に進み出る。しかしラマはシンタに向き合おうとせず彼女の貞操を証明するように要請する。シンタは神の転生である夫が妻を疑うことの非道を訴え嘆き悲しみ、彼女の侍女であるトリジャタは「貞節なシンタを疑うラマはラクササ（羅刹）の心を持つ」と激しくラマを責める(Sunardi 1979: 324-326)。妻を擁護するトリジャタの言葉をラマは内心では嬉しく聞くものの、多くの武将達の面前でラマは態度を変えず、納得したシンタは火の試練を受ける(Sunardi 1979: 326)。シンタは燃えさかる火の祭壇に入り、火神ブラマに救われる。火神ブラマはシンタをラマに託し、以下のように語る。

> 「ラマウィジャヤ(ラマの意)よ、なぜ妻を疑うのだ？このマンティリ国王女は清浄で少しも穢れていない。そなたはためらってはならぬ。その証拠に彼女は火に入って焼かれることがなかった。それどころか彼女の身体は磨かれた金のようになった。そなたはもう長い間彼女の夫であるから妻の性格を知っているはずだ。思い出すのだ、そなたはウィスヌであり人間界を守る義務を果たしているところであろう。このような迷いはまったく根拠がなく、多くの人々を悲しませる。天界からは最高神が多くの神々と女神を引き連れて心配してやって来たほどだ。今となってはすべての人に、そなたがウィスヌでありシンタがその妻デウィ・スリであることがわかる。この世界を守るそなたの義務を遂行せよ。」(Sunardi 1979: 327)

ここでは、シンタの貞操が神々の立会いのもとに証明されたことが示される。それに加えてラマがウィスヌ(ヴィシュヌ)神の転生でありシンタはジャワ島の女神デウィ・スリの転生であることが語られる。ジャワ島の影絵芝居の中では、シンタはデウィ・ウィドワティなる女性の魂をもつとされる。デウィ・ウィドワティはウィスヌ神の妻であるデウィ・ラクスミ、または稲の女神デウィ・スリの形をとって現われ、ジャワ女性の原点を象徴するとされる(松本 1993: 95, 109)。インドの神話におけるラクシュミーを稲の女神デウィ・スリとして描くのはジャワ島独特の解釈である[(10)]。ジャワ島の影絵芝居の中では、魔王ラワナがシンタを誘拐するのはデウィ・ウィドワティの魂を追い続けているためであるという解釈が多く見られ、ラワナが完全なる悪の象徴として描かれてはいないことが特徴的である。

以上のようにシンタの描写には、美しさと貞操という要素が強調されていることがわかる。

図１　ジャワ島の影絵芝居におけるラーマとシーター 出典：Djajasoebrata, Alit 1994, *Shadow Theatre in Java: The Puppets, Performance and Repertoire*. Amsterdam and Singapore: The Pepin Press. p.156

### ３－３　ラマ以外の登場人物に関する記述：武将としての男性像

一方、ラマ以外の登場人物で、武将としての「男らしさ」の典型として知られるのが、魔王の弟であるクンバカルナという登場人物である。クンバカルナは魔王と同じくラクササ(羅刹)の姿であるが、正義感の強い登場人物であり、兄の悪事について批判的である。しかしクンバカルナは戦いの無益を承知で、兄のため、祖国のために負け戦に出陣して戦死する。クンバカルナは、兄の悪事を非難するが、最終的には「おまえのような存在がアルンカ(ランカー国)を護るためにどのような役に立てるのか？」というラワナの問いかけに奮起して、祖国を守るために戦場へ向かう(Sunardi 1979: 275)。クンバカルナが、恩義を受けた兄のために、そして祖国を守るために犠牲となるエピソードは、ジャワ島の影絵芝居の中でも多くの人々の共感を呼ぶ部分となっている。

### ３－４　スナルディの『ラマヤナ』におけるジェンダーのステレオタイプ

スナルディの『ラマヤナ』に見られる特徴は、男性像には容姿のみならず戦いでの強さ、高潔な志、神の転生としての資質、王として武将としての覚悟、年長者に対する恩義と忠誠、など多くの側面が見られる点であろう。また理想の女性像の項目は主として容姿と男性に対する貞操に重点が置かれるが、女神の転生であること、魔王に屈しない強い精神、などの側面も見られる。男性像にも女性像にも多くの側面が見られるが、違いは女性の登場人物は語りや台詞を通して自らの強さや思想を表現することはできるが実際に行動を起こすということはできない、という点であろう。

このような強く美しく高潔な武将であるラマの男性像と、美しく貞淑な女性であるシンタの女性像は、インドの叙事詩をはじめとする伝統演劇のレパートリーの中では共通に見られる特徴でもある。インドネシアの大衆演劇におけるジェンダー規範を考察した論考の中で、ハットレイは伝統演劇の上演は主として「男性の領域」における様々な伝統儀礼に際して男性の演者によって行われることを指摘する(Hatley 1990: 186-187)。ハットレイは、伝統演劇のヒロインが美しく、洗練されており、謙虚で、男性に尽くすというステレオタイプ化された女性像であるのは、伝統社会における男性の側の理想を体現すると述べる(Hatley 1990: 187)。スナルディの『ラマヤナ』は、伝統演劇の一ジャンルである影絵芝居のレパートリーに基づく著作であるため、上記のような傾向は見られる[(11)]。ただし、先にも述べたようにヒロインが自らの思想を語りの中で表現する部分も描かれており、またシンタの侍女トリジャタはシンタの貞操を疑うラマを強く非難する。これらの特徴はジャワの人々がインドの叙事詩を受容する過程において物語を変化させた結果であると考えられる。

また、以下に考察するコミックの『ラマヤナ』では「伝統的」なジェンダー規範を逸脱する大幅な改変を見ることもできる。

## 4　R.A.コサシの『ラマヤナ』における男性像と女性像

### 4－1　ラマの描写における男性像

以下にコミックにおける男性像の描写を検討する。まず、ラマの神の転生としての位置づけについての記述である。魔王ラワナとの戦いに際して不死身のラワナ退治に悩むラマは一時瞑想にはいる。その間ラマの体から浮遊したウィスヌ神は，一枚の葉の上に座る年老いた修行者ワリキリアと出会い、問答を行う。修行者は，この世に善の力と悪の力の均衡状態があることの重要性を説く。「ラワナが死ななければ悪がこの世を支配する」と反論するウィスヌに対し，修行者は「悪人を一生牢屋につないでおけば悪いことは出来ない」と述べて，その場を去る。この言葉からウィスヌは，不死身のラワナを追い詰めて閉じ込めることを考えつき，再びラマの身体に戻る(Kosasih 1975: 551-555)[(12)]。

この部分の描写は、ラマがウィスヌ(ヴィシュヌ)神の転生であることを読者に示す重要な場面である。スナルディの『ラマヤナ』の中ではラマが神の転生であることは記述の中で示されるが、コミックではラマの身体から神が浮遊して戦闘に関する問答を実際に行ったのち再びラマの身体に戻っていく。こうした描写が目に見える形で行われることで、ラマが神の転生であることがより明確に印象づけられると思われる。

またラマの武将としての高潔さを描く箇所もある。以下は、森や追放される前にラマと父王との対話である。

ラマ：もし父上が約束を破れば神々に対して大いなる過ちと罪を犯すことになるでしょう。武将としての使命に反すればより罪深くなるでしょう・・・。私は12年間の放浪の旅に出立いたしましょう。明日父上にお暇乞いにまいります。
ダサラタ：ああ、息子よ。父の罪を許してくれ。おまえこそは真の武将である。しかし私はおまえが行ってしまったら悲嘆に暮れるだろう。ルガワ(ラマ)・・・どうかおまえがいつも偉大なる神に護られるように・・・。 (Kosasih 1975: 76)

ここでは、父王に破約の罪を犯させないよう、自ら宮殿を出ていくラマの決意が表明され、父王に対する恩義と忠誠を尽くす姿が描かれる。最愛の息子を失った父王はこの後病に臥せりこの世を去る。

ラマの強さについては、多くの戦いの場面で描かれる。物語の最初の部分で怪物に占拠された村を救う部分でもラマとラクスマナの強さが描かれる(Kosasih 1975: 1-12)。またマンティリ国を占拠する巨大な怪鳥カラスと戦う際にもラマは素手で戦いに臨み、カラスの嘴を地中に埋め込んで降参させる(Kosasih 1975: 24-30)。また弓の名手としての戦いぶりも各所に描かれる(Kosasih 1975: 152, 517, 560-573)。スナルディ版と同様に特別な武器を所有することも描かれる(Kosasih 1975: 560)。

以上のようにコミックの中でもラマは強く、高潔な王子として描かれる。

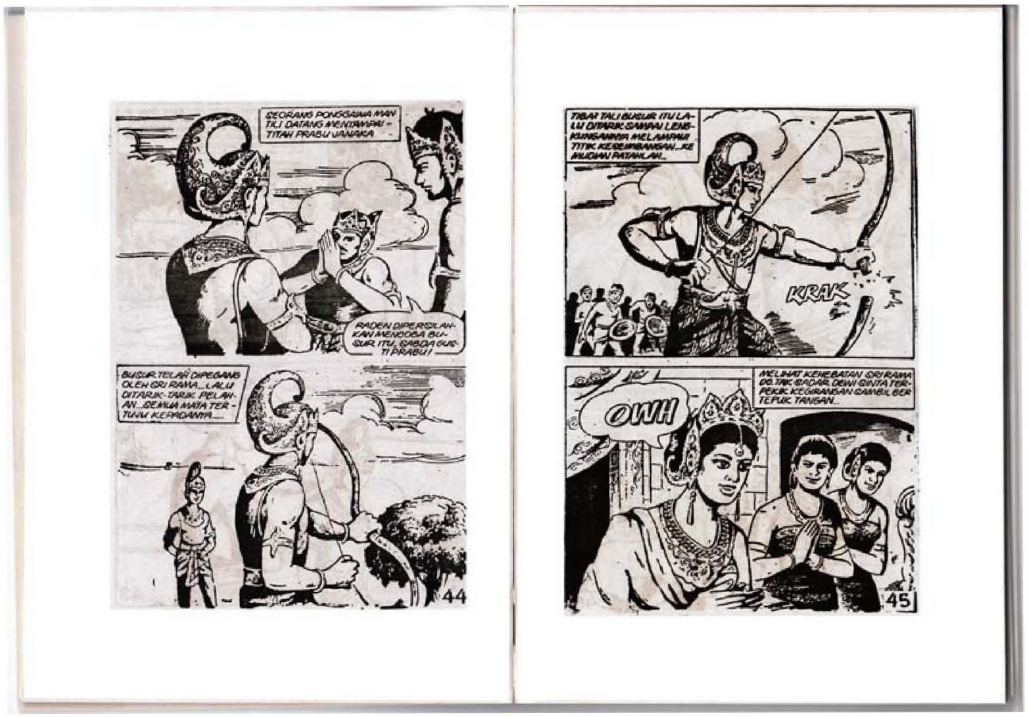


図２　シンタの婿選び競技で弓を引くラマ　出典 Kosasih 1975: 44-45

### ４－２　シンタの描写における女性像

シンタの美しさについては、スナルディ版と同様にヨギスワラがラマにシンタの美貌について語る場面があり、さらに婿選び競技の場で初めて出会ったラマがシンタの美しさに心を奪われる記述が見られる(Kosasih 1975: 14, 35)。

シンタが魔王の欲望に屈しないことの記述も見られる。宮殿の奥に閉じ込められたシンタは嘆き毎日を過ごしていたが、魔王が近づくと自殺すると宣言したため、魔王はシンタに近づくことができなかったという記述が見られる(Kosasih 1975: 191)。

シンタの貞操に関する描写としては、ラマが敵国へ視察に出かけるハヌマンに指輪を託し、その指輪でシンタの貞操を試す部分がある。指輪はシンタの指にぴったりとはまり、彼女が貞操を守り続けていることの証左となる(Kosasih 1975: 173-192)。

一方、物語の最終部分の火の試練に関する描写は、コミックの中ではかなり改変されている。ラマから身を清めるように命じられたシンタがその意図を理解して自ら火の祭壇に飛び込む部分は，コサシのヴァージョンの独特なエピソードである。この部分は，スナルディの『ラマヤナ』にも見られたように、再会を喜ぶシンタに対してラマは背を向けて身の潔白を疑いシンタは嘆き悲しみ火の祭壇に入る，という内容である。

しかしコサシのコミックでは異なっている。ラマは戦いの後、侍女トリジャタを呼び出し、シンタに身を清めるようにという伝言を託す。ラマの伝言を受けたシンタはすぐにそれを理解し、疑義を抱く若いトリジャタに対して身を清めることの意図を説明する(Kosasih 1975: 580-583)。シンタは火の祭壇を用意するようにハヌマンに命じ，自ら火の中に身を投じる。火の中には火神による玉座が用意されておりシンタの貞節は証明される。シンタは最初からラマの意図を理解するという設定になっており，火の試練の前には 2 人が微笑みあう場面まで付加されている(Kosasih 1975: 589)。

この部分の描写で特徴的なのは、身を清めるというラマの要請をシンタが即座に了解し納得する、という点である。作者のコサシがこの部分の内容を影絵の上演やスナルディの『ラマヤナ』と違うものに変えた理由は明確ではない。多くのこどもの読者を想定して貞操を疑うことの是非をめぐる論議を避けたという可能性は考えられる。また 4－4 で後述するようにシンタの侍女であるトリジャタという登場人物に関するエピソードをより充実させたこともその理由として考えられる。

### ４－３　武将としての男性像に関する解釈

コミックの中には武将としての男性像に関する特徴的な描写が見られる。ジャワ島の影絵についての著作においてシアーズは、コサシの行った改変の特徴的事例としてラワナの弟ウィビサナ（ヴィビーシャナ）のエピソードを挙げている[Sears 1996: 276-277]。ウィビサナは兄ラワナがシンタを誘拐したことに対して批判的な見解を示す。兄を諌めても聞き入れられず，最終的にラマの軍勢にねがえる，という設定になっている。ウィビサナは，ラワナを長兄とする 4 人の兄弟の中で唯一人ラクササと呼ばれる羅刹の姿で

はなく美しい武将として生を受け、公正な人格を持つ。

しかしジャワの人々の考え方によれば，悪人とはいえ自分の兄を裏切ることは年長者への忠誠心を欠くことである。したがってウィビサナの行動に対するジャワの人々の評価は批判的である。ウィビサナのエピソードは，批判的に言及される代表的事例である。ラワナのもう一人の弟であるクンバカルナは，ラクササではあるが誠実な人格を持ち，前述のように兄を批判しつつも最後まで兄に忠誠を尽くす。家族や年長者に対する忠誠心，同意して属した政党への忠誠心などを重んじるジャワの人々の社会的評価は，クンバカルナに軍配を挙げておりウィビサナに批判的である(ハルジョウィロゴ 1992: 53-54)。

コサシは，ジャワ島の人々の批判を考慮して、このエピソードを改変した。スナルディ版では，ウィビサナは兄ラワナにシンタを返すように忠告するが，怒ったラワナに頭を足蹴にされたため敵の陣営にねがえったとされる。一方コサシのヴァージョンでは，ウィビサナがラワナに忠告した際，怒ったラワナがウィビサナを殺してしまうという展開に変更されている。父親の死を悲しむトリジャタのためにハヌマンがウィビサナを見つけ出しラマの陣営に運び薬草ラタマオサンディで蘇生させる(Kosasih 1975: 207-211, 219-228)。ウィビサナは自らラマの陣営にねがえったのではなく，ラマの陣営で息を吹き返したため当然の帰結としてラマ軍勢に加勢した，というのがコサシの解釈である。

この事例は，インドネシアのとりわけジャワの人々にとって武将としての「男らしさ」がいかに重要であるかということを示す興味深い事例のひとつである。善の側へ寝返ったにもかかわらず、ウィビサナは兄に対する恩義と忠誠という点では武将としての「男らしさ」に欠けると批判されてきた。そこでコサシは、ウィビサナが兄の魔王に恩義と忠誠を尽くすことが不可能であった状況を創り出した。登場人物の社会的評価を考慮して武将としての行為を正当化するために物語の変更を行った興味深い事例である。

なお、クンバカルナの武将としての高潔さについては、コサシのコミックの中でもスナルディ版と同様の記述が見られる。弟の不義理を嘆くラワナに向かってクンバカルナは、「悪を擁護するためにではなく敵から王国を守るために戦場へ行く」と語り、出陣を決意する(Kosasih 1975: 416)。ラクササでありながら、兄と王国への忠誠を誓って犠牲になった登場人物として描写されている。

### ４－４　トリジャタとハヌマンの恋物語

コサシのコミックにおいてもっとも特徴的な点は、シンタの侍女であるトリジャタをクローズアップして、彼女と猿の武将ハヌマンとの恋愛を描いた点である。トリジャタは、魔王ラワナの弟ウィビサナの娘であり、ラワナの姪に当たる。さらわれたシンタの身の回りの世話をしながらシンタを励まし続けた人物とされる。父親であるウィビサナは、先に述べたように正義感が強く最終的にはラマの軍勢に寝返って数々の手柄を立てる。

影絵芝居の上演やスナルディの『ラマヤナ』では、トリジャタは魔王ラワナの呪詛によって年老いた猿ジュムバワンと結婚することになる。ある日、魔王ラワナは言いなり

にならないシンタをだますために、アルンカ(ランカー)国に囚われていた武将の首をはねて、ラマと弟ラクスマナのものとしてシンタに差し出す。悲嘆にくれるシンタを励まし、その首を調べて囚われの武将のものであるとつきとめたのがトリジャタであった。魔王ラワナは、トリジャタの余計な手出しに怒り、将来は老いた猿と結婚することになるだろうと呪う。トリジャタはそれをきいて嘆き悲しむが運命は変えられず、老いた猿ジュムバワンと結婚して娘を産む。その娘は後にマハーバーラタでクレスナ(クリシュナ)の妻として登場することになる[13]。

一方コサシのコミックの中では、トリジャタの言動は「伝統的」な影絵芝居とは大きく異なっている。

猿の武将ハヌマンはアルンカ国に使者として送り出された後、ラマのもとへ帰る途中で泣いているトリジャタと出会う。トリジャタは父親ウィビサナがラワナに殺されたことを告げる。ハヌマンは捨てられたウィビサナを探し出す約束をして、トリジャタと別れる。ウィビサナを見つけたハヌマンはラマのもとへ帰り、ラマの命令によって魔法の薬草でウィビサナを蘇生させる(Kosasih 1975: 218-227)。このようにハヌマンはコミックの中で、トリジャタにとって父親の命の恩人となる。

また前述のようにラワナは二人の囚人を犠牲にしてその首をラマとラクスマナのものとしてシンタを騙そうとする。落胆したシンタをなだめるトリジャタは，ラマの無事を確かめるために密かに宮殿を抜け出し，巨大な亀の背に乗ってラマのもとへ向かう(Kosasih 1975: 229-237)[14]。トリジャタはそこでハヌマンに導かれ父親ヴィビサナと再会し，ラマにシンタの状況を伝える。帰り道にはハヌマンが自らトリジャタを抱きかかえて飛翔し宮殿へ送り届けるというエピソードが挿入される。この時ハヌマンは自分の欲望を抑えきれず，海中に精液を落とす。それが後の日に息子トゥガンガとなることが語られる(Kosasih 1975: 243)。

物語の最後には，ラマがシンタの貞操を試す場面が描かれる。ラマはトリジャタを呼び出し，シンタに身を清めるようにとの要請を伝言する。シンタは火の祭壇を用意するようにハヌマンに命じ，自ら火の中に身を投じる。火の中には火神による玉座が用意されておりシンタの身の潔白は証明される。しかし、シンタの身を案じたトリジャタは後から火に身を投じてしまう。ハヌマンがトリジャタを救い出し，娘の命を救ったハヌマンにウィビサナが娘との結婚を許すというエピソードが見られる(Kosasih 1975: 580-595)。

影絵芝居の中では，ハヌマンはトリジャタとは結婚せず，トゥガンガもトリジャタとの間に生まれた息子ではない。トゥガンガはハヌマンが以前に契ったウランラユンの息子であり，さらにウランラユンは魔王ラワナとの間にブビスという怪物の姿の息子も授かっている。一方トリジャタは前述のようにラワナの呪詛により年老いた猿ジュムバワンと結婚し、後続のマハーバーラタにおける重要な登場人物を産む。このような影絵芝居の物語には多くの伏線が見られる。伏線は後の物語の展開において重要なものがあるにもかかわらず，しばしば展開が錯綜して必然性がわかりにくく，時には受け入れがた

い要素を内包する。コミックの読者にはこどもが多かったこと、また影絵芝居に親しむジャワ人以外の人々が多かったことなどの理由から、コサシはこうしたわかりにくい物語の展開を避けたのだと考えられる。コミックにおいてハヌマンがトリジャタを助ける場面が多く描かれ，2 人は恋に落ち、最終的には結ばれるという筋書きになっていることは，読者を混乱させることなく読者の期待に沿うようなわかり易い物語を提示することに貢献したと言えるだろう。

### ４－５　行動的な女性像の創出

このように、スナルディの『ラマヤナ』や影絵芝居の上演の中では重要ではあるもののそれほどめざましい活躍をしなかったトリジャタという登場人物を、行動的で勇気にあふれる女性としてコサシが描いた背景には、欧米のコミックの影響があったと考えられる。コサシの初期の作品でスーパーヒロインを描いた『スリ・アシ』は、アメリカのコミック『スーパーマン』の女性ヴァージョンとも言えるものである。普段は一見普通の女性として登場する主人公が、ひとたび事件に遭遇するとジャワの伝統衣装をまとったスーパーヒロインに変身して事件を解決する。インドネシアのジャーナリストであるクリスティナによれば、この作品は登場人物設定や変身などの点で『スーパーマン』との類似点が多く見られる(Christina 2003)[15]。コサシはこの他にもアラブ風の衣装をまとったスーパーヒロインを描いた作品『シティ・ガハラ』を創っており、勇ましい女性のキャラクターを好んで登場させてきた。『ラマヤナ』に登場するトリジャタは、コサシの好んだ勇ましい女性像を体現していると言えるだろう。コサシは、トリジャタという登場人物を通して「伝統的」なジェンダー規範を逸脱するような女性の積極性や行動パターンを描いた。スナルディの『ラマヤナ』においても、トリジャタはシンタの貞操を疑うラマを強く非難する正義感の強い女性として描かれる。だがコサシのコミックに描かれるように、自らラマの陣営に赴いたり、シンタの救出を試みる、という行動を起こすには至っていない。コサシは、トリジャタという登場人物を自ら行動を起こす女性として描いている。ラーマーヤナのように広く普及している物語をコミックにするにあたって、ヒロインであるシンタの行動規範や性格描写を大きく変えることは難しかったと考えられる。そこでトリジャタという人物をクローズアップして「伝統的」な規範にしばられない女性像を提示し、さらに白猿ハヌマンとの恋愛という要素を付け加えたのではないだろうか。

## 5　まとめ

この論考ではスナルディの『ラマヤナ』とコミックの『ラマヤナ』を取り上げて、両者における男性像と女性像について考察した。

スナルディ版には、インドネシアのジャワ島独自の解釈や規範が見られることが指摘

できる。これはこの書物がジャワ島において親しまれてきた影絵芝居の物語群に由来するためであると言えるだろう。理想の男性像が容姿端麗で戦いに強く高潔な魂を持っており、理想の女性像は美しく貞節であるという典型的なジェンダー規範はたしかに見られた。それに加えて、シンタがジャワ島の女神デウィ・スリの転生として位置付けられている点、武将としての「男らしさ」を貫くクンバカルナの戦死が多くの人々の共感を呼ぶ点、シンタの貞操を疑うラマを女性の登場人物トリジャタが激しく非難する点などは、ジャワ島における独自の価値観に基づくものだと考えられる。

一方、コミックの『ラマヤナ』には、ジャワ島をはじめ特定の地域における解釈や価値観に傾倒しない要素が多く見られる。むしろここで際立っているのは作者独自の解釈や創作である。ジェンダーの規範に関しても、スナルディ版との共通点が見られる一方で、コサシ自身による解釈や海外コミックの強い影響を受けたと思われる改変がある。ラマの身体からウィスヌ(ヴィシュヌ)神が浮遊する描写、ウィビサナの武将としての行為を正当化するための改変、トリジャタを行動的な女性として描き原作に存在しない恋愛関係を付加した点などは、この物語が多くの人々に受け入れられるようにコサシが行った独自の改変である。コミックの読者として想定されたのが、特定の地域の人々に限定されなかったこと、またこどもを含む幅広い年齢層の人々であったこと、などもこうした改変の背景にはあったと考えられる。

この論考では、事例とした書物とコミックにおける記述の検討を行うにとどめたため、スナルディ版を主なレパートリーとする影絵芝居の人形やコミックの画像の特徴についての分析を行うことはしなかった。こうした造形や画像の検討を通して、「男らしさ」や「女らしさ」のあり方を考察することは、今後の課題としたい。

［注］

(1) インドでは、ラーマ王子はコーサラ国のダシャラタ王の息子であり、シーターはヴィデーハ国のジャナカ王の娘とされる。

(2) 叙事詩ラーマーヤナは東南アジアの各地に普及したが、物語の題目や登場人物名は地域によって異なっている。インドネシアでは、『ラマヤナ』と呼ばれ、登場人物名も、ラマ Rama 、シンタ Sinta 、ラワナ Rahwana 、アノマン Anoman またはハヌマン Hanuman などと変化している。またジャワ島中部では a を[o]と発音する傾向があるため、ロモ、シント、ラウォノという発音になるが、ここでは煩雑になるのを避けるために、ジャワ島中部の発音を採用せず、アルファベット表記に合わせたカタカナ表記とした。

(3) スナルディは、『スラット・パダランガン』の収集者として、ジャワ島･スラカルタの Kanjeng Gusti Pangeran Adipati Arya Mangkunagara Ⅶ, Kanjeng Pangeran Arya Kusumadeningrat , またオランダ人研究者 J. Kats の名を挙げている(Sunardi 1979: 7)。

(4) ジャワ島のラーマ物語の研究の中で青山亨は、ヴァールミーキによるヴァージョン

の系統を引き継ぐ物語を「古典的系統」、『スラット・カンダ』の系統を引き継ぐ物語を「近世的系統」と呼んでいる(青山 1998: 140-150)。

(5) スナルディによると、この他の参考文献は以下の通りである(Sunardi 1979: 7)。
Sindusastra, Raden Ngabehi 1930 *Arjuna Sasrabahu*. Balai Pustaka Weltevreden Seri No. 889, Jilid 1-6.
n.n. 1911 *Serat Rama*. Van Dorp & Co Semarang dan Surabaya.
n.n. 1922 *Ramawijaya*. Kolf Bunning Yogyakarta.
スナルディによれば、作者不詳の二つの文献は、スラカルタの宮廷詩人ヨソディプロによって書かれたと推測される(Sunardi 1979: 7)。

(6) スナルディの『ラマヤナ』の構成は、『スラット・パダランガン』とは異なっており、また統一のとれた項目設定になっていなかったため、本文中に章立てを列挙しなかった。章立ては以下の通りである。アヨディアのダシャラタ王、ラマブルガワの死、森での生活、シンタ金色の鹿と出会う、シンタの誘拐、ラマ愁嘆、ジャタユとの出会い、ラマ再び愁嘆す、スバリとスグリワ、スバリの死、マリアワン山へ戻る、キスケンダでの生活、アノマン使者となる、アノマン宮殿に潜入す、シンタの居所を見つける、最初の戦いラワナとの対面、マエンドラ山の様子、猿軍の出発、マエンドラへの到着、アルンカの戦士の集結、ウィビサナの追放、アンガダ使者に発つ、アルンカ戦場となる、猿軍の出陣、両軍の対面、戦いの続行、ジャンブマンリとミントラグナの戦死、プラゴンサの戦死、バジュラムスティの戦死、アニプラバの戦死、ウィルパクサの戦死、アンガダとインドラジッドの戦い、インドラジッド蛇の矢を放つ、猿軍の嘆き、デウィ・シンタの失神、ラマ希望を失う、神々の不安、ドゥムレクサの戦死、カムパナの戦死、クンバカルナの目覚め、クンバカルナとラワナの対談、クンバカルタ戦場へ赴く、クンバカルナの猛威、スグリワとクンバカルナの対戦、クンバカルナの戦死、ラワナの息子達の戦死、クンバカルナの息子達の戦死、サルパクナカの運命、インドラジッドの戦死、ラワナの猛威、ラワナの戦死、デウィ・シンタについてのアノマンの問いかけ、シンタの火の試練、ラマ軍のアヨディアへの帰還

(7) コサシのコミックは，1950 年代以降バンドゥンのメロディ Melodi 社から出版されていたが，のちに同じくバンドゥンのマラナタ Maranatha 社から出版された。メロディ社はマラナタ社にコサシの版権を売ろうとしなかったため，マラナタ社からコミックを出版するにあたって，コサシは新たに作品を書き下ろしたという経緯があった[Christina 2003]。マラナタ社は現在エルリナ Erlina 社と名乗っている。

(8) バンドゥンのエルリナ社でのインタビューの結果によると、1970 年代にはジャワ島のジャカルタに 3 箇所、バンドゥン、スラバヤ、ジョグジャカルタに代理店があり、バリ島にも代理店があった。ジャワ島とバリ島以外の地域には個人を通した取引きがあったとされる(2009 年 3 月 17 日：エルリナ社でのインタビュー)

(9) 美しい外見は高潔な魂を伴ない、醜い外見は邪心や悪行を伴なうというステレオタイプは、主人公ラーマと魔王ラーヴァナとの対比にも見ることができる典型的対立項である。ただし全ての登場人物がこれにあてはまるわけではない。魔王の弟クンバカルナのようにラクササの外見であっても正義感の強い登場人物も存在する。この論考では取り上げなかったが、ラーマ登場以前の物語群には、ラクササ姿で純粋な心を持つ弟スカスラナと容姿端麗だが野心家の兄スマントリの物語も存在する。また、影絵芝居に登場する道化役者も滑稽な容姿の中に偉大な力を持つことで知られる。このように、醜悪な容姿や滑稽な容姿の登場人物が純粋で偉大な精神を持つという考え方もジャワ島の影絵芝居の物語の中で多く見られる。

(10) ヒンドゥーの神話におけるヴィシュヌ神の妻はラクシュミー(日本では吉祥天として知られる)である。ラクシュミーは豊穣とそれによってもたらされる富や幸運の女神とされる。豊穣という点で、ジャワ島の稲の女神との共通点が見られると考えられる。ただし、ジャワ島には様々な稲の起源神話が存在し、その多くにおいて稲の女神デウィ・スリは自らの弟であるスダナ王子と共に描かれることが多い。

(11) ただし、もうひとつの古代インドの叙事詩で、インドネシアのとりわけジャワ島に深く浸透したマハーバーラタにおいては、独自の女性の登場人物像も見られる。たとえば、ジャワ島のマハーバーラタに登場する女戦士スリカンディ(シカンディン)は、インドにおけるオリジナルの物語では男性として登場する。ジャワ島においては、女性戦士でありまた勇者アルジュナの第2夫人として登場する。影絵芝居におけるスリカンディの人形の造形からは、顔をやや上向きにした勇ましい性格の描写が見られる。戦いの中では、敵陣の老武将ビーシュマと相対し、昔ビーシュマが誤って殺してしまった女性アンバーの霊の助けを借りて弓矢を引き、ビーシュマを倒す。また同じくマハーバーラタの登場人物であるパーンダヴァの妻ドラウパディーは、自ら戦うことはないが、自分を凌辱しようとした敵陣の武将ドゥフシャーサナの血で髪を洗うまでは、髪を髷に結うことはしないと宣言し、大戦争勃発の大きな原動力となる。

(12) スナルディ版の『ラマヤナ』とは異なるが、ジャワ島の影絵芝居の上演において魔王ラーヴァナは不死身のため戦死することはなく山の下敷きになったと語られることが多い。特に中部ジャワのジョグジャカルタ近郊ではムラピ山という火山の下にラーヴァナがまだ生きており、時折りラーヴァナの怒りによって火山の噴火がおこるという言説もある。

(13) トリジャタはジュムバワンとの間に一女ジュムバワティをもうけ、マハーバーラタにおいてジュムバワティはクレスナの妻となり息子サンバを産む。

(14) トリジャタが亀の背にのってラマの陣営に向かうことができるならば、トリジャタはなぜシンタを連れて逃げなかったのか？という疑問も当然出てくるであろう。この理由としては、コミックの中で、指輪を持って使いに来たハヌマンに対してシン

タが「ラマによって魔王の手から解放されたい」という希望を伝えていることが考えられる。スナルディ版にはなかったが、影絵芝居の上演の中でも、指輪によって貞操を試そうとするラマの意図に対して、シンタが必ずラマ自身の手によって自由にされたいという希望を述べる部分がある。またもう一つの理由としては、シンタが王妃であるため、他の者がみだりに手を触れることができなかったという可能性もある。

(15) クリスティナによると、『スリ・アシ』の中にはその正体を探ろうとしているサンバスという青年が登場する。彼の同僚で普段は普通の女性であるナニという人物がスリ・アシに変身する。サンバスはナニを疑ってはいるが、彼女がスリ・アシであるという確証をつかめたことはない。クリスティナはこの登場人物設定が『スーパーマン』におけるルイーゼとクラークの二人の関係に非常に似ていることを指摘する(Christina 2003)(コンパス紙 2003 年 1 月 18 日の記事)。

## 引用文献


Ajidarma, Seno Gumira.(2000), Menjual Komik Indonesia: Paham dan Salah Paham, *Kompas*, 5 November 2000.(『コンパス』紙 2000 年 11 月 5 日「インドネシアのコミック販売における理解と誤認について」)

青山　亨(1998),「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承－物語と表現の変遷」, 金子量重・坂田貞二・鈴木正崇編『ラーマーヤナの宇宙－伝承と民族造形』春秋社, 140-163 頁

Bonneff, Marcel.(1998), *Komik Indonesia*. Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia.

Christina, Nova.(2003), Sri Asih, Superhero Pengubah Sejarah. *Kompas*, Saptu, 18 Januari 2003. (『コンパス紙』2003 年 1 月 18 日　「スリ・アシ，歴史を変えたスーパーヒーロー」)

Chudori, L. (1991), R. A. Kosasih: Di Tengah Pandawa dan Kurawa. *Tempo*, 21 December 1991, pp.41-67.(『テンポ誌』1991 年 12 月 21 日　「R.A. コサシ：パンダワとクラワの間で」)

Djajasoebrata, Alit.(1994), *Shadow Theater in Java: The Puppets, Performance and Repertoire.* Amsterdam and Singapore, Pepin Press.

ダウリング・コレット　木村浩美 訳(1984). 『シンデレラ・コンプレックス』三笠書房

福岡まどか(2009a),「インドネシアにおけるラーマーヤナ物語の再解釈: R.A. コサシのコミックを事例として」,『東南アジア－歴史と文化－』38 号, 106-140 頁

_____. (2009b),「ジャワ島の舞踊劇スンドラタリ *sendratari* におけるラーマーヤナの内容と提示方法」,『東洋音楽研究』第 74 号, 109-121 頁

_____. (2010),「インドネシア・ジャワ島の影絵芝居と人形劇における物語－ラーマーヤナを事例として－」,『説話・伝承学』第 18 号, 189-207 頁

Hatley, Barbara.(1990), Theatrical Imagery and Gender Ideology in Java. In J. M. Atkinson and S. Errington (eds.), *Power and Difference: Gender in Island Southeast Asia,* Stanford:

Stanford University Press, pp. 177-207.
岩本裕(1980),「解題『ラーマーヤナ』」『ラーマーヤナ』第一巻,平凡社,223-350 頁
_____.(1985),「解題『ラーマーヤナ』」『ラーマーヤナ』第二巻,平凡社,286-355 頁
Kosasih, R A. (1975), *Ramayana* A,B,C., Bandung, Erlina
松本亮(1993),『ラーマーヤナの夕映え』八幡山書房.
牟田和恵(1999),「新たな社会システムをめざして」,満田久義・青木康容編著『社会学への誘い』,朝日新聞社,134-140 頁
大野　徹( 1993), 「東南アジアのラーマーヤナ－インドネシア･マレーシア･フィリピンの伝承」,『大阪外国語大学アジア学論叢』第 3 号,37-70 頁
_____.　(2000),『東南アジア諸語版「ラーマーヤナ」の比較研究』,大阪外国語大学東南アジア古典文学研究会(平成 9,10,11 年度科学研究費補助金研究成果報告書　課題番号 0961526)
Sears, Laurie J.(1996), *Shadows of Empire: Colonial Discourse and Javanese Tales*. Durham and London: Duke University Press.
Sunardi, D. M.(1979), *Ramayana,* Jakarta: Balai Pustaka.
八木祐子(1990),「シーターの夢：婚姻儀礼の歌にみる家族関係」,八木祐子編『女性と音楽』藤井知昭監修　民族音楽叢書２,東京書籍, 175-200 頁

# Gender imagery in Indonesian Ramayana stories

Madoka FUKUOKA

This study focuses on the imagery of male and female characters in Indonesian Ramayana stories. The Indian epic-poem Ramayana has spread across many regions of Southeast Asia, having been adopted as the main theme in various performing art and written text forms such as novels, adapted stories, and comic books.

In this study, I consider the imagery of the male and female characters in two works of the Ramayana: D.M. Sunardi's text *Ramayana* and R.A. Kosasih's comic work.

Sunardi's text is mainly based on the repertoires of shadow puppet (*wayang*) stories in Java. Therefore, we can observe the stereotyped gender imagery in his text, such as the female characters possess the traditional qualities of beauty, the virtue of modesty, total devotion to their male counterpart, and chastity.

On the other hand, some unique gender ideologies are included in R. A. Kosasih's comic work. Kosasih not only employed traditional gender ideologies such as obedient female characters, but also created episodes where the female character acted independently. The gender ideology in Kosasih's work is a result of the interactions between established traditional values and newer, Western, influenced ideological concepts.